

地域再生とまちづくり

—各都市が目指すものは

<第38回>

転機は「春日の局」

時の鐘や蔵造りの街並みで知られている川越市は、埼玉県の南西部に位置する人口約35万人の城下町で「小江戸」の別名を持ち、年間665万人が訪れる観光都市である。

川越市が一躍、観光都市として脚光を浴びるようになったのは、89（平成元）年に放映された大河ドラマ「春日局」で喜多院を巡る観光ブームに

火が付き、観光客が年間240万人から340万人へと一挙に100万人も増え、官民一体となって観光振興に取り組みようになってからのことである。

川越の蔵造りの街並みは1893（明治26）年の川越大火を契機として生まれ、消失した街の復興に我が国固有の

耐火建築物である土蔵造りを採用したもので、当時の洋風好みの意匠も加わり第一級の建造物群が誕生した。

昭和30年代に入ると、川越市の商業中心地は、JRなどの駅がある市街地南部に移ったことから、市街地北部に当たる一番街周辺は経済的地盤沈下に見舞われ、商店街の活性化が急務となった。

このような中、71年に大沢家住宅（1792年築）が国の重要文化財の指定を受け、伝統的な蔵造りを生かしつつ商店街を再生しようとの動き

「会」を発足させ、街並み保存に関する提言活動を展開した。89年に始まった商店改装事業は、ファサード修景補助となる「観光市街地形成事業」等の導入により、蔵造りをはじめとする伝統的建造物を古いものとは考えず、その存在感を生かした現代的な店舗として再生された。また、88年に「景観都市条例」を制定

埼玉県川越市・蔵造りの街並みと景観整備

が出てきた。これが川越における蔵造り保存の先駆ける活動となり、83年に「川越蔵の門前通りをネット化し、街に

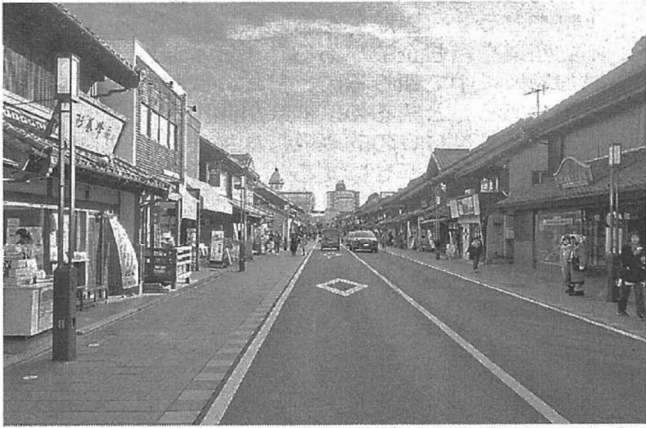
がでてきた。これが川越から川越市が整備し、89年から川越市が整備した「歴史事業」は、石畳の街路により一番街周辺の横丁や門前通りをネット化し、街に

観光リピーターを吸引

川越が元気である背景には、街並み保存が大きな要因ではあるが、90年に完成した川越駅とそれに続く西武本川越駅の再開発があり、また、97年から進められた「クレアモール」の整備により、若年層や観光リピーターの吸引力が飛躍的に向上した。これら蔵造りゾーンと駅周辺ゾーンとの連携により更なる繁盛が目ざされている。

川越の観光スポットの「二時の鐘」

伝統的な蔵の街。電線の地中化で電柱はない



駅周辺再開発も貢献 伝統生かし商店街再生



川越の観光スポットの「二時の鐘」

指定を受け、同時



菓子屋が集まった「お菓子横丁」

にグッドデザイン賞の第1回「アーバンデザイン賞」、国の都市景観大賞を受賞し、現在も住宅などを交えた新たな改装の動機づけにもなっている。